

第42回 日本心身健康科学会 学術集会
人間総合科学大学大学院 研究発表会
合同大会

プログラム・抄録集

メインテーマ
『心身健康科学の現在地と展望』

会期：2026年2月21日（土）

会場：ハイブリッド開催

人間総合科学大学 蓮田キャンパスおよびオンライン Web 会議システム（Zoom）



日本心身健康科学会
The Japan Society of Health Sciences of Mind and Body

- 参加費：学会員早期申込 3,000 円，通常申込 5,000 円

- 大会参加者へのお願い

1. 一般口演発表の先生方へ

- (1) 発表方法は、PowerPoint 使用でのプレゼンテーションとします。
- (2) 発表時間は、発表 7分，質疑応答 8分の計 15分間です。発表中は6分経過時（発表終了1分前），7分（発表終了），15分（演者交代）に，それぞれベルでお知らせします。
発表時間は厳守してください。
- (3) 発表用スライドの枚数に制限はありませんが，発表時間に見合うものとしてください。
- (4) 動画や音声ファイルを使用される場合は，事前の動作確認を特に入念に行ってください。
- (5) 発表用データは，2/18（水）12:00までに学会事務局（jshas@human.ac.jp）宛にメールにファイルを添付してご提出ください。
- (6) 口頭でのご発表とあわせて，ポスター発表も行っております。詳細につきましては，学術集会 HP（https://jshas.human.ac.jp/rally/42nd_meeting/）をご確認ください。

※ (5) についての補足説明（詳細は上記の学術集会 HP をご確認ください）

事前にご提出いただいたデータファイルの動作確認は学会事務局でも行いますが，特に動画や音声をご使用の場合は当日の動作保証はできかねますことをご承知おきください。なお，学会事務局で使用するパソコンの OS は Windows です。

当日は学会事務局で用意したパソコンにて，発表を行っていただきます。

2. 座長の先生方へ

- (1) 前セッションの終了後，速やかにご担当いただくセッションの準備を始めてください。
- (2) 演者の発表時間の超過がないように，適切に進行してください。

3. 質問される方へ

質問される方は座長の許可を得た後，所属と氏名を述べてから発言をお願いします。なお，質疑応答の時間は限られておりますので，要点のみを簡潔にご質問ください。また，発表時間超過防止の都合上，座長より発言の許可を得られない場合があります。

4. オンライン参加者の方へ

大会中，座長や発表者の許可を得た発言者以外は，音声はミュートにしておいてください。ミュートを外すと発声していなくとも，生活音が伝わる場合がありますのでご注意ください。

第 42 回 日本心身健康科学会 学術集会

人間総合科学大学大学院 研究発表会

合同大会

プログラム

2026 年 2 月 21 日 (土)

ハイブリッド開催

人間総合科学大学 蓮田キャンパスおよび
オンライン Web 会議システム (Zoom)

【午前の部】

9 : 10			受付開始
9 : 40	～	9 : 50	開会挨拶
9 : 55	～	10 : 55	一般口演
10 : 55	～	11 : 00	休憩・時間調整
11 : 00	～	11 : 45	一般口演
11 : 45	～	11 : 55	休憩・時間調整
11 : 55	～	12 : 55	最終講義
12 : 55	～	13 : 45	昼休憩

【午後の部】

13 : 45	～	15 : 10	ポスターセッション
15 : 10	～	15 : 25	探究ポスター発表
15 : 25	～	15 : 30	休憩
15 : 30	～	16 : 30	教育講演
16 : 30	～	16 : 40	奨励賞発表・閉会挨拶
16 : 40	～	17 : 30	懇親会

1. 開会挨拶

(9 : 40～9 : 50)

2. 一般口演 (発表7分, 質疑応答8分)

(9 : 55～11 : 45)

座長：小川 由香里 (人間総合科学大学大学院 心身健康科学専攻 博士後期課程)

中山 和久 (人間総合科学大学)

9:55～10:10

演題1：生きがいの再定義：意味経験の時間的累積モデル

○中村 美佳¹⁾

1) 高知県立大学法人 高知工科大学 工学研究科 博士課程

10:10～10:25

演題2：准看護師の語りからみた職業意識とキャリア形成上の課題

○鈴木祐子¹⁾, 鈴木麻記²⁾

1) 人間総合科学大学 保健医療学部 看護学科

2) 日本福祉大学 福祉経営学部

10:25～10:40

演題3：就労中の母親の「首尾一貫感覚」と職業性ストレス【博士学位申請】

○岸田 加容子¹⁾, 吉田 浩子²⁾, 川村 春美²⁾

1) 人間総合科学大学大学院 人間総合科学研究科 心身健康科学専攻 博士後期課程

2) 人間総合科学大学大学院

10:40～10:55

演題4：授乳期の母親のSNS利用が心理的・身体的健康に与える影響【博士学位申請】

○時田 純子^{1,2)}, 矢島 孔明³⁾, 鈴木 はる江³⁾

1) 人間総合科学大学大学院 人間総合科学研究科 心身健康科学専攻 博士後期課程

2) 東京純心大学 看護学部

3) 人間総合科学大学大学院

座長：山城 亮輔（沖縄リハビリテーションセンター病院）

内田 都（人間総合科学大学）

11:00～11:15

演題 5：災害救援者の惨事ストレスにおける心身の相互作用

○牧野 友裕¹⁾，鈴木 はる江²⁾，北原 圭²⁾，川村 春美²⁾

- 1) 人間総合科学大学大学院 人間総合科学研究科 心身健康科学専攻 修士課程
- 2) 人間総合科学大学大学院

11:15～11:30

演題 6：内受容感覚が覚醒度の異なるポジティブ感情に対して及ぼす影響【博士学位申請】

○吉澤 英里^{1,2)}，小岩 信義³⁾，吉田 昌宏⁴⁾，吉田 浩子³⁾

- 1) 人間総合科学大学大学院 人間総合科学研究科 心身健康科学専攻 博士後期課程
- 2) 星槎道都大学社会福祉学部
- 3) 人間総合科学大学大学院
- 4) 武蔵野大学看護学部

11:30～11:45

演題 7：かわいさの評価は青斑核の Tonic 活動の時間構造を変える【博士学位申請】

○本岡 正彦¹⁾，北原 圭²⁾，鍵谷 方子^{2),3)}

- 1) 人間総合科学大学大学院 人間総合科学研究科 心身健康科学専攻 博士後期課程
- 2) 人間総合科学大学大学院
- 3) 人間総合科学 心身健康科学研究所

3. 最終講義

(11:55～12:55)

座長：矢島 孔明（人間総合科学大学）

人間総合科学から心身健康科学へと辿った道のり

鈴木 はる江（人間総合科学大学大学院 人間総合科学研究科 教授）

(昼休憩)

4. ポスターセッション (13 : 45～15 : 10)

人間総合科学大学大学院 研究発表会

5. 探究ポスター発表 (15 : 10～15 : 25)

人間総合科学大学 人間科学部

心身健康科学科 総合探究研究発表会

6. 教育講演 (15 : 30～16 : 30)

座長：鈴木 はる江 (人間総合科学大学)

心身健康科学との出会いから研究まで
—冷痛刺激研究を通して考える心身相関—

鵜沢 淳子 (学校法人鉄蕉館 亀田医療大学 看護学部看護学科)

7. 奨励賞発表・閉会挨拶 (16 : 30～16 : 40)

8. 懇親会 (～17 : 30)

教育講演

抄録

心身健康科学との出会いから研究まで —冷痛刺激研究を通して考える心身相関—

鵜沢 淳子

学校法人鉄蕉館 亀田医療大学 看護学部看護学科

「こころ」と「からだ」の密接な関連について、看護師の視点からその大切さを考えながら臨床に携わる中で、「心身相関」という言葉に出会い、人間総合科学大学心身健康科学専攻に進学した。心身相関の研究では、刺激に対する生体反応とその刺激をどのように感じたか、という感情の両面を捉えることが不可欠である。私たちが経験する感情は主観的なものであり、身体の変化は自律神経活動や脳活動などの生体反応として現れる。この感情と生体反応を統合的に捉えることが心身相関の理解の基盤となる。博士課程では、この心身相関の視点に立ち、生体反応を客観的に捉え、主観的な感情との関係を整理することを目的として、冷痛刺激によって引き起こされる感情の変化と脳活動との関係を検討した。冷痛刺激は感覚入力であると同時に情動喚起刺激であり、不快感といった主観的感情の変化と生体反応としての脳活動を同時に捉えるのに適した刺激である。この刺激に追加された疼痛増強刺激によって起こる生体反応の変化についても検討した。脳波の周波数別パワー値の変化に基づき脳内活動を推定し、機能的脳ネットワークの特徴を解析した。その結果、冷痛増強刺激時には、認知的処理に関与する前頭部の活動が覚醒度および不快度の増大に関連する一方、痛覚処理に関与する島皮質の活動低下が不快感の調整に寄与することが明らかになった。

一方で、初めての実験研究であったことから、条件設定やデータ処理には多くの試行錯誤を要し、解析のやり直しや理解不足に直面した。その都度、先行研究を確認し、指導教員との面接を通して疑問点について助言を受けながら理解を深めていった。こうした経験を通して、生体反応と感情という異なるレベルの現象を丁寧に整理し、問い続けながら研究に向き合う姿勢の大切さを学んだ。

本講演では、心身相関を扱う研究を進める中で直面した課題や工夫について共有し、心身を統合的に捉えるための視点について考えるとともに、初めての研究を進める中で経験した迷いや困難、それを乗り越える過程を紹介し、研究を進める皆様にとって、研究に向き合う姿勢や問いを大切にすることの意味を考えるきっかけとなれば幸いである。

一般口演

抄録

生きがいの再定義：意味経験の時間的累積モデル

○中村 美佳¹⁾

1) 高知県立大学法人 高知工科大学 工学研究科 博士課程

【目的】

先行研究において「生きがい」は、健康・長寿・幸福との関連が医学、心理学、社会学の各分野から示されてきた。しかし、多くはアウトカムとの関連に留まり、生きがいがいかに生成・維持され、行動や生命予後に影響を及ぼすのかという動的プロセスは十分に説明されていない。本研究は、生きがいを静的状態ではなく、意味経験が時間軸上で累積し、未来に向けた行動を駆動するプロセスとして再定義し、その統合モデルを実証的に検討することを目的とした。

【方法】

研究は三段階で構成した。第一に、年齢、健康状態、社会背景の異なる 135 名を対象に半構造化インタビューを実施し、生きがいを構成する要因を質的に抽出した。第二に、その結果を基に尺度項目を構成し、全国 1000 名を対象とした質問紙調査を行った。第三に、高知県四万十町において生きがい関連介入を含む探索的実験を実施し、質的・量的知見を統合的に分析した。

【結果】

分析の結果、生きがいは、生物学的基盤、社会的関係性、主観的意味生成の相互作用から創発され、意味ある経験が時間軸上で累積する動的プロセスとして整理された。この累積は、意識的自覚や快感情を必須とせず、疾患、加齢、社会的制約下においても成立し得ることが示唆された。さらに、意味経験の累積が、未来に向けた行動継続や役割保持を媒介し、生活上の選択や関与の持続と関連する傾向が確認された。

【考察】

生きがいを時間的累積過程として捉えることで、主観的概念が行動持続や生理的レジリエンスを通じて健康アウトカムと関連する機序を説明可能とする。

【結論】

本研究は、生きがいを「意味ある経験の時間的累積」として再定義し、その累積が未来に向けた行動継続を支える基盤であることを示した。

倫理審査申請承認機関：高知工科大学倫理審査委員会（承認番号：352）。

本研究の一部は、観光庁「令和 6 年度新発見事業」採択案件として、高知県四万十町と連携して実施された。

キーワード：心身健康科学、生きがい、意味生成、時間的累積、混合研究法

准看護師の語りからみた職業意識とキャリア形成上の課題

○鈴木祐子¹⁾，鈴木麻記²⁾

1) 人間総合科学大学 保健医療学部 看護学科

2) 日本福祉大学 福祉経営学部

【目的】

准看護師制度は、1990年代に社会問題化し制度存続論と制度廃止論の議論が起こり、看護婦制度の統合の方向が提示されたが、約30年が経過したのちも実現に至っていない。制度の方向性が見えず社会状況が変化するなかで、現在の准看護師としての役割認識、正看護師との関係性、及びキャリア構築の実態を明らかにすることを目的とした。

【方法】

本研究の分析対象は、准看護師7名から半構造化面接を行い得られたインタビューデータである。内容は同意のもと、ICレコーダーに録音し、逐語録を作成したものを質的帰納的に分析した。分析の妥当性を担保するためにピア・デブリーフィングを実施した。

【結果】

分析の結果、以下の4つの側面が明らかになった。第一に【生活者としての視点を持つ実践】である。対象者は、自身の生活経験に基づいた視点を活かし、実践者として仕事に自負を持っていた。第二に【過酷な現場で共有される連帯感】である。人手不足の現状で正看護師との間に心理的な乖離はなく、「共に闘う」パートナーとしての関係性が構築されていた。相互に確認し合える良好な協働体制にあった。第三に【生活基盤の安定をもたらす資格の価値】である。特に社会人経験者にとって、准看護師資格は経済的・社会的な生活の安定を保証すると認識されていた。しかし第四に【向上心を阻む制度的障壁】が存在した。「転職する場は限局している」や「キャリアアップに意欲はありながら阻まれる現状」があり「キャリアアップ後に描けない未来」と経済的に保障されない現実があった。

【考察】

本研究の対象者は、現場の一員として協働意識と高い職業意識を持っていた。特に社会人経験者は、生活者としての視点がケアに活かされていた。しかし、その意欲に対し教育制度や支援体制が追いついていない現状が示唆された。

【結論】

准看護師の進学やキャリアアップなどを支援する体制の必要性が示唆された。

倫理審査申請承認機関：人間総合科学大学（第704号）

キーワード：准看護師，インタビュー調査，社会人経験，資格職

就労中の母親の「首尾一貫感覚」と職業性ストレス

○岸田 加容子 1), 吉田 浩子 2), 川村 春美 2)

1) 人間総合科学大学大学院 人間総合科学研究科 心身健康科学専攻 博士後期課程

2) 人間総合科学大学大学院

【目的】

わが国で就労中の母親の職業性ストレスモデルの構築を目的に、その端緒として、「首尾一貫感覚（以下 SOC: Sense of Coherence）」と職業性ストレスの関連を明らかにする。

【方法】

2025年12月26日～2026年1月2日に、調査会社A社を介したオンライン質問紙調査を実施し、登録モニターのうち、1,200人から回答を得た(年代・子どもの有無・雇用形態は均等割り付け)。休職中の19名を除き、「母親」群584人、「非母親」群597人を解析対象とした。解析に用いた調査項目は、属性、職業性ストレス簡易調査票(ストレスが高いほど得点が高い)、SOC、身体症状スケールで、統計解析には χ^2 検定、Studentのt検定、Welchのt検定、Mann-WhitneyのU検定を用い、SPSS Statistics Ver.31を使用した。有意水準は $p < 0.05$ とした。

【結果】

「母親」群は「非母親」群に比べSOC「心理的な仕事の負担(量)」「自覚的な身体的負担度」身体症状スケール合計点と下位項目である「背中、または腰の痛み」「腕、脚、または関節の痛み」の得点の平均値が有意に高かったが、「平均労働時間/週」の各選択肢を選択した人数の割合は有意に低かった($p < 0.05$)。反対に、「非母親」群は「母親」群に比べ「仕事のコントロール度」「働きがい」「活気」「サポート」「満足度」の平均値が有意に高かった($p < 0.05$)。

【考察】

「母親」群は「非母親」群に比べストレス対処能力の一種であるSOCが高く、勤務時間が短いにもかかわらず、心身の職業性ストレスが高い、「非母親」群とは異なったストレスの諸相を示すと言える。

【結論】

就労中の「母親」群と「非母親」群では、SOC、職業性ストレスのあり方が異なることが実証的に示され、就労中の母親に特化した職業性ストレスモデルの構築の重要性が示唆された。

倫理審査申請承認機関：人間総合科学大学（第760号）

キーワード：心身健康科学，母親，SOC，職業性ストレス，被雇用者

授乳期の母親の SNS 利用が心理的・身体的健康に与える影響

○時田 純子^{1, 2)}, 矢島 孔明³⁾, 鈴木 はる江³⁾

1) 人間総合科学大学大学院 人間総合科学研究科 心身健康科学専攻 博士後期課程

2) 東京純心大学 看護学部

3) 人間総合科学大学大学院

【目的】

授乳期の母親は、育児負担や夜間の孤立を背景に孤独感を抱きやすい。近年、SNS は時間的・空間的制約を補う支援手段として注目されているが、母親の心理的・身体的側面との関連を包括的に検討した研究は少ない。本研究は、授乳期母親の SNS 利用と孤独感・幸福感・疲労感との関連を明らかにすることを目的とした。

【方法】

2025 年 7 月、18 か月未満の子どもを育てる母親 600 名を対象に Web 調査を実施した。SNS 利用状況 (X, LINE, Instagram)、孤独感 (UCLA 孤独感尺度短縮版)、主観的幸福感尺度、疲労感 (新版自覚症しらべ) を用い、記述統計、相関分析、階層的重回帰分析を行った。

【結果】

単変量解析では、SNS の利用目的によって主に孤独感に差がみられ、共感やサポートを目的とした利用では孤独感が低く、情報収集を目的とした利用では孤独感が高い傾向が認められた。孤独感は幸福感と負の相関、疲労感と正の相関を示した。階層的重回帰分析の結果、経済状況に起因する育児負担は孤独感・幸福感・疲労感のすべてと有意に関連していた。SNS 利用は孤独感に対してのみ有意な関連を示し、X の利用時間は孤独感と正の関連、X の利用頻度および LINE の利用時間は負の関連を示した。一方、幸福感および疲労感に対して、SNS 利用の有意な関連は認められなかった。

【考察・結論】

本研究の結果から、授乳期母親の SNS 利用は心身の健康全般と一様に関連するものではなく、孤独感という特定の心理的側面との関連が示唆された。特に、SNS の利用量そのものよりも、SNS の種類や利用の仕方の違いが、孤独感との関連に影響している可能性が考えられる。SNS は対面支援を代替するものではなく、孤独感軽減を目的とした補助的な支援資源として位置付ける必要がある。

倫理審査申請承認機関：人間総合科学大学（第 734 号）

キーワード：心身健康科学，SNS，母親，孤独感，幸福感

災害救援者の惨事ストレスにおける心身の相互作用

○牧野 友裕¹⁾, 鈴木 はる江²⁾, 北原 圭²⁾, 川村 春美²⁾

1) 人間総合科学大学大学院 人間総合科学研究科 心身健康科学専攻 修士課程

2) 人間総合科学大学大学院

【目的】

大規模災害における警察、消防、自衛隊、医療従事者等の救援者は、凄惨な現場への曝露や自身の被災、住民からの非難といった「惨事ストレス」に晒されている。これらは PTSD 発症や QOL 低下を招くだけでなく、任務遂行にも深刻な影響を及ぼす。本研究は、心身健康科学の基盤である、心と身体が相互に影響し合う「心身相関」の視点から、救援者のストレス緩和と回復促進に寄与する支援の在り方を検討することを目的とする。

【方法】

医中誌 Web を用い、「災害」「ストレス」「救援 OR 救助」をキーワードに文献検索し、2025 年 7 月 30 日までに公開された原著論文 235 件を抽出し、救援者の災害派遣活動を主眼とした 32 件を最終的な分析対象とした。各文献からストレス要因・反応・対処法の種類を抽出し、分類化を行った。

【結果】

救援者の反応は、恐怖や無力感（精神的）、食欲不振や不眠（身体的）、過活動（行動的）と多岐にわたり、相互に影響していた。特に、家族の安否や職場での労いといった「環境・社会要因」が心身の安定に強く寄与する一方、「身体的疲労が不安を生み、不安が身体の硬直を招く」といった悪循環も確認された。対処法は、情報の整理（情報処理型）、休息の確保（問題焦点型）、チームでの共有（社会的支援模索型）などに整理された。

【考察】

活動段階に合わせた介入が重要である。活動前は確実な情報提供により事態を「脅威」から「挑戦」へ再評価させ、活動中は「休息・栄養の確保（身体ケア＝精神ケア）」を優先すべきである。活動後はデブリーフィング等による認知的再評価が有効となる。心・身体・環境の相互作用を捉えたアプローチは、個人のレジリエンス向上に不可欠である。

【結論】

救援者のケアには、個人のセルフケアに加え、心身相関のメカニズムを理解した多角的な支援が求められる。身体的アプローチを通じた精神的回復の促進は、任務遂行体制の維持に寄与する。

キーワード：心身健康科学，災害救援者，心身相関，惨事ストレス，メンタルヘルス

内受容感覚が覚醒度の異なるポジティブ感情に対して及ぼす影響

○吉澤 英里^{1, 2)}, 小岩 信義³⁾, 吉田 昌宏⁴⁾, 吉田 浩子³⁾

1) 人間総合科学大学大学院 人間総合科学研究科 心身健康科学専攻 博士後期課程

2) 星槎道都大学社会福祉学部

3) 人間総合科学大学大学院

4) 武蔵野大学看護学部

【目的】

本研究は、内受容感覚の3次元（正確性・感受性・意識）とポジティブ感情の評定（覚醒度・感情価）との関連について、感情誘導法を用いて検討することを目的とした。

【方法】

大学生32名（分析対象23名）に対して、内受容感覚と感情誘導時の感情評定の計測を行った。内受容感覚の「正確性」と「意識」のスコアは心拍追跡課題により求め、「感受性」のスコアは質問紙（MAIA-J, BPQ-BAVSF-J, IAS-Jを使用）の得点を統合した。感情誘導として、IAPS画像の標準化値に基づく3条件（ポジティブ高覚醒条件、ポジティブ低覚醒条件、ニュートラル低覚醒条件）を設定し、画像提示から5分間の安静を維持した後、想起に基づく感情評定（覚醒度・感情価；Self-Assessment Manikinを使用）を計測した。

【結果】

感情誘導の確認（3条件による1要因分散分析）の結果、ポジティブ高覚醒条件ではポジティブ低覚醒条件より覚醒度が高く（ $F(2, 44) = 5.29, p < 0.01, \eta_p^2 = 0.19$ ）、ポジティブ低覚醒条件ではニュートラル低覚醒条件よりも感情価が高く評定された（ $F(2, 44) = 4.96, p < 0.05, \eta_p^2 = 0.18$ ）。線形混合モデルでは、覚醒度評定に対する刺激条件×内受容感覚の交互作用は認められなかった。一方、感情価評定に対する刺激条件×内受容感覚「意識」の交互作用が有意であり（ $\beta = 1.79, t = 2.38, df = 21, p < 0.05$ ）、特にニュートラル低覚醒条件において、「意識」が高いほど感情価が低く評定された（ $\beta = -1.66, t = 2.20, df = 33.53, p < 0.05$ ）。

【考察】

内受容感覚と覚醒度評定との関連は、感情誘導の条件差として明確には認められなかった。一方、感情価の手がかりが相対的に乏しいニュートラル条件では、内受容感覚「意識」が感情価評定に関与しうることが示唆された。本研究は刺激提示直後ではなく安静後の想起評定であり、刺激中の反応との対応が弱まったことで、覚醒度評定との関連が検出されなかった可能性がある。

【結論】

ポジティブ感情と内受容感覚との関連は3次元（正確性・感受性・意識）で一様ではなく、主観的評定（特に感情価評定）には「意識」が関わることを示唆された。

倫理審査申請承認機関：人間総合科学大学（第728号）、星槎道都大学（第2025001号）

キーワード：心身健康科学、内受容感覚、ポジティブ感情、覚醒度、感情価

かわいさの評価は青斑核の Tonic 活動の時間構造を変える

○本岡 正彦¹⁾, 北原 圭²⁾, 鍵谷 方子^{2),3)}

1) 人間総合科学大学大学院 人間総合科学研究科 心身健康科学専攻 博士後期課程

2) 人間総合科学大学大学院

3) 人間総合科学 心身健康科学研究所

【目的】

「かわいさ」は単一の情動ではなく、美的性および親しみ感といった性質の異なる評価軸から構成される複合的情動価である。これらの評価軸は、主観的印象のみならず、生理的反応の制御様式にも影響を及ぼす可能性がある。本研究では、かわいさを構成する中心的変数である美的性・親しみ感の違いが、青斑核 (locus coeruleus; LC) の推定指標である瞳孔反応に与える影響を検討した。

【方法】

主観的评价 (男性 9 名, 女性 25 名, 平均 21.4 歳) および画像提示実験 (男性 7 名, 女性 23 名, 平均 21.4 歳) を実施した。主観的评价では 10 枚の画像に対し、美的性・親しみ感を 7 件法で、覚醒度を VAS で評価した。画像提示実験では、四角形, シルエット, 親しみ感・美的性低い評価の猫画像 1, 高い評価の猫画像 2 を暗環境下固定視で提示し (背景 30 秒, 刺激 15 秒), 瞳孔径および眼球運動を測定した。瞳孔反応は時間構造解析, カーネル分解を実施した (瞳孔反応を LC の構成成分で持続的反応である Tonic 成分と, 一過性変化である Phasic 成分に分解する解析手法)。

【結果】

主観的评价では、猫画像 1 と猫画像 2 の間には、美的性および親しみ感において有意差が認められた。一方、主観的覚醒度および眼球運動指標には有意差は認められなかった。瞳孔反応解析では、瞳孔反応は主として LC の Tonic 成分によって構成されていた。猫画像 1 と猫画像 2 において、画像に対する反応様式 (時間構造) に違いが認められた。

【考察】

本研究の結果は、美的性および親しみ感の違いが、主観的覚醒度や視覚的注意配分といった指標には反映されず、LC の Tonic 成分に対応する時間構造に反映されることを示している。

【結語】

美的性および親しみ感は、LC の Tonic 活動を介して刺激応答過程の時間構造を調整する要因として機能した可能性が示唆された。

倫理審査申請承認機関：人間総合科学大学 (第 R726 号)

キーワード：覚醒, 猫画像, 瞳孔反応, 眼球運動, 青斑核ノルアドレナリン神経系

—MEMO—

—MEMO—



日本心身健康科学会 事務局
人間総合科学大学 人間総合科学 心身健康科学研究所内
〒339-8539 埼玉県さいたま市岩槻区馬込 1288
E-Mail : jshas@human.ac.jp URL : <https://jshas.human.ac.jp>